

教師の大切にしていることと子どもへの関わりとの関連

酒井 啓輔*・瀬戸美奈子**

Relation between teachers' belief and their support for children

Keisuke SAKAI, Minako SETO

要 旨

本研究の目的は、教師の大切にしていることと子どもへの関わりとの関連について明らかにすることである。経験年数の異なる5人の小学校教員へインタビュー調査を実施し、分析を行った。その結果、教師の大切にしていることは子どもへの理解や対応、指導に関連しており、大切にしていること、関わり方ともに教職経験によって違いがあることが示唆された。①経験年数が少ない教師は大切にしていることが抽象的であるのに対し、経験年数の豊富な教師は大切にしていることが具体的である、②子どもへの関わりについても経験年数が少ない教師は子どもとの一対一の関わりが基本になっているのに対し、経験年数の豊富な教師は対応する子どもに加え、その周りをも視野に入れた関わりになっていることが示された。

キーワード：教師、子ども、理解、関わり、経験年数

1 問題と目的

教師はクラス担任をもつと、一人で30人もの子どもを指導していかなければならず、重い責任を感じながら、経験値やスキルによってその重責を果たしていく。教師としての経験を積み重ねる中、「子どもとどう関わるべきである」という信念、いわば教師の大切にしていることが生まれてくるのではないだろうか。そしてその「大切にしていること」が教師自身の実際の子どもへの関わりに関連してくると考えられる。

教師の信念について、黒羽(2005)は「教室での行動選択の根底に存在する『教師の信念』が、教授・学習活動とその対象である子どもの捉え方を規定している」と述べている。また、河村・國分(1996)は「教師特有の指導行動を生むイラショナルベリーフ尺度」を作成しており、河村・田上(1997)はこの尺度の合計得点と教師が担任する学級児童のモラル得点との間に負の相関を見出し、教師の強迫的なベリーフが負の影響をもたらすことを実証している。このように教師の信念は、子どもへの関わりと関連し、子どもにも

影響を及ぼすと考えられる。

池田(2007)は教師の成長を「実践を振り返る中で目標に向かって上に伸びていくものだけでなく、その場の状況や相手との関係により、今まで無意識・半意識だったことに気づいたり、これまでの自信が揺らいだり、価値観や前提を批判的に捉え直したりすることで生涯に渡って、絶えずさまざまな方向に変容していくことの積み重ねのプロセス」と定義している。無意識・半意識だったことへの気づきや、これまでの自信、価値観や前提の中には信念も含まれるとすれば、教師の成長と信念は関連しており、成長に伴ってその信念にも何かしら変容があると考えられる。

このように、教師の信念と子どもへの理解との関連について研究した論文は散見される。しかし、具体的に教師にインタビューを行い、そこから子どもへの関わりとの関連を細かく分析した論文は、まだ少ない。そこで、本研究では、経験年数の異なる五人の小学校教員へのインタビューから、教師の信念(大切にしていること)と子どもへの関わりとの関連について明らかにすることを目的とする。

* 三重大学大学院教育学研究科

** 三重大学教育学部

2 方法

調査対象者 A 県の小学校教員 4 名（男性 1 名、女性 3 名）と B 県の小学校教員 1 名（女性）。

調査時期 2013 年 8 月上旬から 9 月下旬

インタビュー構造 半構造化面接

インタビュー内容

- ① a 子どもとの関わりで大切にしていること、b その理由
- ② a どんな時に子どもへの対応が上手くいったと感じたか、b それはなぜ上手くいったか
- ③ a どんな時に子どもへの対応が上手くいかなかったと感じたか、b それはなぜ上手くいかなかったか、c その時にはどのように対処したか
- ④ a 一番印象に残っている子ども、b なぜその子を選んだか、c その子との関わりを通した自身への影響

3 結果と考察

インタビューを行った小学校教員のプロフィール表を以下に示す。(Table 1)

Table 1. 調査対象者のプロフィール

	性別	経験年数	勤務校数
A 先生	男	3 年	1 校
B 先生	女	3 年	1 校
C 先生	女	12 年	5 校
D 先生	男	17 年	5 校
E 先生	女	19 年	5 校

以下、インタビューでの発言を引用しながら、各教師が大切にしていることと子どもへの関わりについて考察する。

(1) A 先生 (3 年目・男性)

A 先生は① a について、「まずは、困っている子がないか。全体を見て。まずはそこを一番大切にしたいと思っています。」「個々の関わりでいうと、まずは、信頼を得ることかな。ま、どうやって信頼関係を築くかっていうのはすごい難しいんですけど」と答えている。A 先生は、困っている子がないか、という目線を非常に大切にしていることが分かる。そして、「集団」としての子どもに目を配りながら困っている子を発見することに注意を向けている。個々の関わりとして、子どもからの信頼を得ることを大切にしており、「子どもからくるものをみて、こっちで受け取って、どういうふうに関わるかを考える。」と述べている。つまり、どのように信頼関係を築くかについては、

子どもから発信されるものを教師が受信するという方法を大切にしていることが発言から読み取れる。

A 先生は子どもから発する言動を手がかりに子どもの理解を行なっているといえる。① b については「言いたいことを聞いてあげるのが一番かな、と思います。」と答えていることから、A 先生の対応はあくまでも子どもが自分から表現すること待ち、受け止めるというスタンスで子どもと関わっていることが推察される。

② a については、「授業で、こっちが自信もってるからかもしれないですけど、自分が大学でやったとき、専門の領域でやったとき、ま、図工ですね。子どもらがめっちゃくいついてきて。」と述べており、自分の得意な領域で子どもの興味関心を引いた時に、子どもへの対応が上手くいったと感じている。

④ a については「問題のある子っていうわけじゃないんですけど、その、研修の中で、この子に注目してクラスの仲間作りをすすめていこうっていうことで、一人選んで…その子を軸にして、周りがその子にどういう風に接するかとか、その子自身がどう変わるのかも考えながら接して。」と答えている。A 先生は個に着目しながらも、個が集団に及ぼす影響を意識しながら、子どもの様子を捉えていることが発言からうかがえる。

④ c については、「その子に言葉を送っていく中で、自分が、それがちゃんとできているのかとか、こうしやなあかんとか、人にやさしくとか、そういうことって、先生として言っとるけど、自分はほんとにできとんのかな。あとは、その子だけじゃなくて、他の子にもそういうのいちいち返しとるかな。普段から言えとるかなって。」と答えている。子どもとの関わりにおいて、子どもを通して自分自身の実践の振り返りを行っており、子どもに指導することがらについては、教師である自分ができていなくてはならないという気持ちを持っていること、自分が軸としている子どもに指導することは、学級の他の子どもにも平等に指導しようという姿勢を大事にしているといえる。

A 先生は、子どもからのアプローチを大切にし、そのうえで、子どもの言いたいことをしっかりと聞くということを中心に関わっていると考えられる。

(2) B 先生 (3 年目・女性)

B 先生は① a については、「結構実際にやると忘れがちになっちゃうけど、子どもの目線で考えなきゃなってしまうことかな。」と答えている。B 先生は、子どもの目線で子どもと接することをとても大切にしていることが分かる。そのため、子どもの気持ちを知ろう、子どもの気持ちに寄り添おうとする姿勢を持っている

と言える。子ども視線を大切にするようになったきっかけとして、「研修で人間関係つくるのがめっちゃ難しくて。ぼっちになることがめっちゃ多いんだって。」と話している。その経験から「そういう友達関係のことって、小学校でも大切だし、親御さんとの話でもよくでる話題なので、改めて大切だなんて思います。」と話している。つまり、自分が人間関係で苦勞する経験をしたことで、自分の子ども時代の人間関係における気持ちを思い出し、子どもの気持ちを知らうとすることの大切さに気付いたのだと考えられる。

②bについては「褒めたからかな。」と答えている。また、④cについては「自分が先生になったきっかけも良いところを伸ばしてやりたいっていう気持ちがあったから。ちょっと失いかけた道を軌道修正してもらったのかな、ある意味その子に。」と答えている。B先生は、子どもを褒めて良いところを伸ばすことを大切にしていると言える。そこから、B先生が子どもを理解する際に、良いところを見よう、褒めようという姿勢を持っていると考えられる。③bについては「その子にもその子なりの理由があってそういうことしたのに、話を聞かずにこっちがもう、一方的に話を聞かずにこっちの主張だけいっておしまいにしちゃったからだと思う。」と答えている。B先生は、子どもの話を聞く姿勢を大切にしていることが分かる。そのため、子どもとの関わりにおいて、子どもの話をしっかりと聞き、気持ちに寄り添って関わろうという姿勢をもっていると言える。

③cについては「クールダウンの時間を設けて落ち着いてから話を聞いたり、かな。」「叱るのはやめてその子の良い所見つけたら、帰る間にその子ちょっと個別で呼んで、さっきああいうふうに言ったけど、それはあなたにこうなってほしいからだよ、っていうのとプラス、…あなたこういうところがすばらしいからこれからもよろしくねとかっていうと、ガラって変わる。」と答えている。B先生は、子どもと関わる際には時間をかけて子どもの話を聞く姿勢をもっていること、子どもの良い所に目を向けようとしていることが分かる。

B先生は、子ども視線をもつことを大切にしており、そのうえで、子どもの話を聞く姿勢をもつこと、子どもを褒めて伸ばすことを中心にして子どもと関わっていると考えられる。

(4) C先生(12年目・女性)

C先生は①aについては「その子の…まあいろんな子がいるんで、しゃべる子がいいんですけど、表情から読むとか、反応から見るとか、そういうのを大切に割としてて…」と答えている。自分から話さない子どもの表情や反応を見ることを大切にしていることが

分かる。そこから、C先生が集団の中の子どもを把握する際に、自分から発信できる子どもではなく、自分から発信できない子どもに主に目を配らせていることが分かる。①bについては「自分が小学校の時に表現っていうことが苦手だったんで、まあ表現できる子はそれでいいかなって思っていて…寄ってくるし、主張もするし、いいし…それからすごく立場の弱い子っていうのは嫌でも目に付くので、関わりますよね、教師も。ただ、その中間層にいる子って、それは満たされているのかもしれないんですけど、それは私にはよく分からなくて…」と答えている。C先生は自分の子ども時代の気持ちをもとにして、表現できる立場の強い子や逆に立場の弱い子ではなく、中間層にいる子どもに着目しているのだと考えられる。

②bについては「自分が関わろうって思ったのと、あとは自分の気持ちと、あとは周りの協力があったからって思う。」と答えている。C先生は、自分から関わろうとする気持ちを大切にしていることが分かる。そのため、子どもへの関わりにおいて、教師の方から関わろうとする姿勢をもっていることが分かる。③aについては「私が感情的になった子はだめですね。」と答えている。子どもと関わる時に、感情的にならないように、常に教師として冷静な気持ちでいることを心がけていることが分かる。③cについては、「できるだけ距離をとります。」と答えている。感情的になってしまいそうな子に対しては距離を取ることで、落ち着いた関わりを心掛けていると言える。

④aについては「…担任する前からなんとなくこの子とは合うかなって。…やっぱり自分の本音の部分で関わった…その子とも本音の部分で関わったし、お母さんとも本音の部分で関わったっていうことで、それでしかも上手くもっていったっていうことが、印象に残っているということかな、と思います。」と答えている。子どもを理解する際に、自分と合う・合わないを軸に、合う子どもとは自分の本音で向き合う姿勢をもっていることが分かる。④cについては「寄りそうだけではだめかなって思いました。…個別の問題を抱えている子を、上手くクラスのなかに位置付けていくっていうことに注意するようになったっていう。」と答えている。個別の問題を抱えている子との関わりにおいて、その子が子ども同士のなかで上手くやっていけるようになることを大切に、そのためにフォローすることを教師の役割と考えていることが分かる。

C先生は、子どもの表情や反応を大切に、そのうえで、個別の問題を抱える子どもに対しては自分から関わろうとすること、反対に合わない子どもとは距離を取り落ち着いて関わること、そして子どもが集団のなかで上手くやれるようフォローすることを中心に

して子どもと関わっていると考えられる。

(5) D先生 (17年目・男性)

D先生は①aについては「話をまず聞くようにしているかな。」と答えている。子どもの話を聞くことを大切にしていることが分かる。そこから、子どもを理解する際に、子ども自身が自分から発する言葉をもとに見ていると考えられる。

②aについては「例えば高学年の女の子でもめとって、話し合いの場を設定したって、ま、一旦退席してんだけど、終わって、で戻った時にお互い良い顔しってたんで、ま、うまくいったかなと。」と答えている。この事例では、子どもに話し合いの場をもたせるところまでは介入し、その後は退席したうえで子ども同士の自主的なやりとりに任せている。D先生は、教師としてある程度フォローをしながらも、基本的には子どもの自主性、子ども同士のやりとりに任せていることが分かる。また、②bについては「その時の子どもの表情とその後の子どもの行動の変化かな。」と答えている。子どもの気持ちを知ろうとする際に、子どもに気持ちを聞き出したりするのではなく、子ども自身の表情や行動など、子どもを見て分かることをもとに子どもの気持ちを推測していると考えられる。③cについては「親とコンタクトとることとか。教育研究所を勧めたのと、研究所ともコンタクトを取りながら進めた、かな。」と答えている。自分では対応しきれない子どもとの関わりにおいて、保護者や外部の機関など、周りの助けを借りながら対応していく姿勢をもっていることが分かる。

④cについては「待たなしゃーないな。あんまこっちがなんかしようしようと思ってやってもあかん時期ってあって。距離をおいてゆっくり待たらなあかんっていう。」と答えている。このことから、教師から子どもに働きかけるというより、子どもが自分から動くのを待つ姿勢を大切にしていることが分かる。そのため、子どもへの関わりにおいて、教師の介入は最小限に、子ども自身が自分の気持ちで動くことを尊重していると考えられる。

D先生は、子どもの話を聞くことを大切にしており、そのうえで、子ども同士の話し合いの場を作るなど、子どもが自分から動くのを待ち、それを後押しすることを中心に子どもと関わっていると考えられる。

(3) E先生 (19年目・女性)

E先生は①aについては「その子の家の背景とか、いつかのこととか、その子がどんなものをしょっている…って言ったら変だけど、抱えて学校っていうところに来ているのかな、っていうのを早くつかみたいと

いうか。」と答えている。①bについては、「子どもってお家から出てくるわけで、家庭の影響をたくさん受けているところが大きい。」と答えている。このことから、子どもの家庭に目を向けることを大切にしていると言える。

②aについては「家の人と連携…話せるようにしておくよと、「あ、そういうことがあったのね」ってそれもすべてわかってあげたいなってなって、一方的にこっちが一面だけを見て怒ったりとか、友達の関わりがどうなんや…。とか一方的な見方をしなくてすむ。」と答えている。子どもの家庭に目を向けるとき、保護者からの情報を大切にしていると考えられる。②bについては「話を聞いてくれる感じが自分でこう…受けるからだと思う。」と答えている。子どもを理解する際に、一方的な言葉かけではなく、多角的な判断材料をもとにして、子どもの話を聞く姿勢をもつようにしていると言える。

③aについては「学校でその子の表面的なものだけを怒ってしまったとき…」「それを親御さんに直接家庭訪問のときにバンと言ってしまった。」と答えている。③bについては「その子は物を…人のを盗んでいたのよ…明らかにその子が盗んでいるって分かっているのよ。なのにそれを認めないし、繰り返しやるっていうので、そこばっか言ってたかな。表面的な。それをお母さんに言ってしまっただけ。」と答えている。子どもの行動を表面的に捉えて、表出している部分だけを見るべきではなく、また、保護者への伝え方にも工夫が必要だと考えていることが分かる。

④cについては「学校っていうのはどういうところ？何をすべきところ？っていうのを考えることが多くなった。…学校では何ができるのかわかっていうのを考えながらいられるようになったかな。」と答えている。子どもの家庭に重きを置き、学校の役割を意識して子どもと関わっていると見える。

E先生は、子どもの背景にある家庭状況を大切に、それを知ったうえで、子どもの表面的な部分だけでなく子どもの内面まで見ようとする、学校の役割を意識することを中心に子どもと関わっていると考えられる。

4 総合考察

五人の教師に行ったインタビューとそれぞれに対する考察をふまえ、総合的に考察をする。

(1) 教師の大切にしていることと子どもへの関わりとの関連

A先生は「子どもからくるものをみて、こっちで

受け取って、どういうふうに関わるかを考える。」、D先生は「待たなしゃないな。」と答えている。A先生もD先生も、子どもからの投げかけを待つ姿勢を大切にしていることが分かる。そのため、子どもとの関わりにおいて、まず子どもの話を聞こうとしていると言える。

B先生は「子どもの目線で考えなきゃ」と答え、子どもの気持ちになって考えようとする姿勢を大切にしていることが分かる。そのため、子どもとの関わりにおいて、「叱るよりも誰かを褒めた時に」や「褒めたからかなー」など、子どもを褒めようとしていると考えられる。

E先生は「子どもってお家から出てくるわけで、家庭の影響をたくさん受けているところが大きい。」と答え、子どもの家庭状況を大切にしていることが分かる。そのため、子どもとの関わりにおいて、子どもの家庭状況を把握したうえで、子どもの表面化された行動だけではなくその内面に隠された気持ちに目を向けようとしていると言える。

C先生は「表情から読むとか、反応から見るとか、そういうのを大切に割としてて…。」と答え、子どもの表情や反応を大切にしていることが分かる。そのため、子どもとの関わりにおいて、特に自分から発信することが苦手な子どもに目を向けようとしていると考えられる。

(2) 教師の経験年数による違い

インタビューは、さまざまな経験年数の教師に対して行ったものであるが、経験年数の違いによって、大切にしていること、および子どもへの関わりに違いが見られた。

① a に対して、経験年数の短いA先生、B先生は「困っている子がないか」「子ども目線で考えるようにしている」と答えている。経験年数の長いC先生、E先生は「あまり話さない子の表情や反応から見る」「家庭環境など子どもが抱えているものを早くつかみたい」と答えている。A先生、B先生の大切にしていることは「子ども目線」など、抽象的な言葉であるのに対して、C先生、E先生は具体的に「どのような子ども」に対して、「どのような視点」をもって理解しようとしているかが述べられている。

A先生は「困っている子がないか」を非常に大切にしている一方で、子ども自身が「困っている」かを、どのように判断するのか曖昧であると言える。

B先生の「子ども目線」という言葉からは、何を基準として「子ども目線」と言っているのかは具体的に語られていない。

経験年数の長いC先生、E先生の大切にしている

ことは具体的である。C先生は、自分からあまり話してこない子どもに特に注意を払っている。また、子どもたちの表情や反応を判断材料にしながら、子どもの様子を捉えている。

E先生は子どもを取り巻く家庭環境に重きを置き、家庭環境や家庭でその日にあったことを判断材料にしながら、子どもの様子に目を配らせている。

以上のことから、経験年数の短い先生は「大切にしていること」が抽象的で、子ども理解の基準やポイントが曖昧であるのに対し、経験年数の長い先生は「大切にしていること」が具体的であると言える。

「上手くいった事例」「上手くいかなかった事例」「その理由」「その対処」を質問した際の答えを見てみると、A先生は「授業で…子どもらがめっちゃくいついてきて」と自分自身の授業での成功体験について語っている。B先生は「褒めたから」「その子の良い所見つけたら…ガラって変わる。」など、自分がどのように対応したか、という部分が中心になっている。

C先生、D先生、E先生は、「周りの協力があってからって思う」、「親とコンタクトをとることとか。教育研究所ともコンタクトを取りながら進めた」、「家の人との連携…一方的な見方をしなくてすむ」と答えている。C先生は、自分の力だけではなく、保護者、管理職、同じ学年の先生、スクールカウンセラーという周りを見て、周りとの連携することが必要であると考えている。D先生は、自分が対応しきれない場合に、保護者や外部の機関など、周りの助けを借りる姿勢もっている。E先生は、家庭での姿も含めて子どもを理解することが必要だと考えている。以上のことから、経験年数の短い先生は、自分の行った対応について主に言及し、経験年数の長い先生は、自分の行った対応だけでなく、周りとの関わりにも言及していることが分かる。細谷・松村(2012)によると、教師は実践を重ねるにつれ、次第に自己から子どもへと焦点が移動する。経験の浅いA先生、B先生は自己に焦点が当てられがちなのに対し、経験の豊富な先生は子どもや保護者、スクールカウンセラー等の自分以外の周りの人にも焦点を当てていると考えられる。ただ、A先生もB先生も「大人との関わり…成長できた」「他の先生にも言われて…」と一部自分自身以外のことにも言及していることから、焦点が自己から移動する過渡期にあるのだと考えられる。

子どもへの対応に関して、A先生、B先生は教師と子どもとの一対一の関わりが基本になっているのに対して、C先生、D先生は子ども同士の関わりに教師がフォローを入れるという姿勢が多い。A先生は「困っている子がないか」を大切にしており、クラス作りも自分自身が気になっている特定の子どもに目をかけ、

その子どもを中心にしている。B先生は、褒めること、良い所を伸ばすことを大切にしており、子どもの話を時間をかけても聞く、という姿勢でいる。それぞれ、子どもとの一対一の関係が基本になっていると言える。一方で、C先生は、個別の問題を抱えている子との関わりにおいて、教師がその子に寄りそうだけではなく、その子をクラスという集団のなかに上手く溶け込ませること、そのためにフォローすることを教師の役割と考えていることが分かる。D先生も、子どもに話し合いの場をもたせるところまでは介入し、その後は退席したうえで子ども同士の自主的なやりとりを任せている。教師としてある程度フォローをしながらも、基本的には子どもの自主性、子ども同士のやりとりを大切にしていると言える。以上のことから、経験年数の短い教師は、教師と子どもとの一対一の関係が中心になっているのに対して、経験年数の長い教師は、自分が対応しようとしている子どもに加え、その周りの子どもも視野に入れた関わりになっていると言える。

(3) 教師の考える「子ども目線」と子どもへの関わり

大切にしていることは、A先生は「子どもからくるものをみて、こっちで受け取って」、B先生は「子どもの目線で考えなきゃな」、C先生は「表情から読むとか、反応から見るとか」、D先生は「話をまず聞くようにしている」E先生は「その子がどんなものをやっているか…」と、それぞれ違っている。その中でも、子どもを中心に据えた関わりはどの教師も一貫しているが、何をもちて子ども中心・子ども目線なのかはそれぞれ異なるのではないか。以下、インタビューの発言からそれぞれの教師がいわゆる「子ども目線に立つ」ということをどのように捉えているのか考察する。

A先生は「あんまり経験もないので、自分からどうのこうのっていう働きかけよりは、子どもからくるものをみて、こっちで受け取って、どういう風に関わるかを考える」と答えている。また、D先生は「話をまず聞くようにしてるかな」と答えている。どちらも子どもの気持ちを聞いたうえで、それを子どもの気持ちとして捉えて関わっていると言える。

一方、B先生は「こういうふう、昔自分焦ってたよなって思うと、もう一回気をつけなきゃな」、「児童目線のきっかけが、今の研修なんだけど。研修で人間関係作るのがめっちゃ難しくって…」と答えている。C先生は「私もその中間層みたいなのところにいる」、「ちょっと声かけてもらうだけで嬉しいっていうのはあって、そういう自分の経験からかなあとか思います」と答えている。B先生やC先生は「自分が子ども時代はこう考えていたな」という気持ちをもったうえで、それを参考にしながら子どもと関わっていることが分かる。

A先生、D先生にとっての子ども目線とは、子どもの話を聞いてそこから子どもの気持ちを知り、それを大切にしながら関わること、B先生、C先生にとっての子ども目線とは、自分自身の子ども時代の経験と照らし合わせながら子どもの気持ちを推測し、そのうえで共感的に関わることであると言える。

(4) 教師の大切にしていることの一貫性

A先生は「困っている子がないか」どうかに目を配らせることを大切にしており、教師からの関わりを大切にしているように感じられる。一方で「子どもからくるものをみて、こっちで受け取って…」と、子どもから言ってくるのを待つというスタンスでも述べており、子どもからの関わりを大切にしているようにも感じられる。教師からの積極的な関わりをもつ姿勢と、子どもからの関わりを待つ姿勢、二つの異なる姿勢をA先生は持っていると言える。

B先生は①aについて「結構実際にやると忘れがちになっちゃうけど、子どもの目線で考えなきゃななって思うことかな。」と答えている。また、②bに対して「褒めたからかな。」と答えている。B先生は子どもの目線を持ち、子どもを褒めて伸ばすことを大切にしていると考えられる。B先生のインタビュー内容からは一貫して、子どもの目線を持ち、子どもは褒められれば嬉しいだろうという推測のうえで、子どもを褒めて伸ばすことを大切にしている様子が窺える。

E先生は、「その子の家の背景とか…早くつかみたい」と、子どもの背後にある家庭状況を大切にしている。また、家庭状況を踏まえたうえで、「学校では何ができるのかなっていうのを考えながらいられるようになったかな。」とも話している。E先生のインタビュー内容からは一貫して、家庭状況をふまえたうえで、学校としての役割を考えながら子どもと関わることを大切にしていると言える。

5 今後の課題

- ① 教師の大切にしていることがどのように形成されていくのか、それが経験に伴ってどのように変化していくのか、その過程については明らかになっていない。
- ② 教師の大切にしていることが子どもにどのような影響を与えているのかについては明らかにされていない。

今後は、縦断的な研究や教師と子どもとの相互作用を見ていく研究が必要である。

引用文献

- 原岡一馬（1989）. 教師の自己成長に関する研究 名古屋大学教育学部紀要, 36, 33-53
- 細谷里香・松村京子（2012）. 児童と関わる時の教育実習生の情動能力：優れた教師との比較 発達心理学研究, 23, 331-342
- 池田広子（2007）『日本語教師教育の方法—生涯発達を支えるデザイン』, 鳳書房, 8頁
- 河村茂雄・國分康孝（1996）小学校における教師特有のビリーフについての調査研究 カウンセリング研究, 29, 44-54
- 河村茂雄・田上不二男（1997）教師の教育実践に関するビリーフの強迫性と児童のスクール・モラルとの関係 教育心理学研究, 45, 213-219
- 黒羽正見（2005）. 学校教育における「教師の信念」研究の意義に関する事例研究—ある小学校教師の教育行為に焦点をあてて— 富山大学研究論集, 8, 15-22
- 高橋悟（2013）. 教師の成長の諸側面の検討 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科紀要, 27, 1-10

インタビューにご協力頂いた先生方に心から感謝申し上げます。